俳諧蕪村七部集　上

イ　4
3157
28(1)

そもそも頼光よりきの角
鬼背のあらし分綱
古郭と御存古郭集と
いふなきハハつ入れ
よろしいれ出たるやうん
きつくし此書肆のこと

14
3157
28
(1)

業にはことさ おまへの
の著作也しかへて
それあつめて小冊をと
なし蕪ねき綿ふと
いれし 世にひろく
ものをいふものをけんと

ひきそこえそこいひ
打あとしはしをと
書あけて打くる

文化戊辰春
自述し

景文画

蕪村翁乃姓は与謝名は寅(エジ)といひ
宰町(サイ)と春星とも号し又夜半亭と号し
ともいへり もとは摂州の人なりしが東武に
住みわたし風雅にこゝろをよせ多くの人となりては
洒く落くとして唐僧にそまず既に俳
諧にしくとも高ね一門のかくれなりて業を為
はさみのはからず画をとられしは京師ようて
芭蕉翁と一双にして今猶世に遠行
俳諧画者にて世に鳴る門人輩とせられ
けるに天明三のとし癸卯十二月に没す
実に中興乃首唱なりといふべし

其雪影序

ここや上達伯より下後進にいたるまて俳諧
せさるもなかりしかれとも中にも一家をたてし世に
称せらるゝ人はきはめてまれなり京摂の間に三四
指を屈するもまたすくなし三四者は誰
几圭せ人指を頗する圭なり巴人菴の
門に遊ひしより真率に微妙なるところ
光庵の得たる所にして其聲牙に化せられたる猶
俳諧年経ることもしらす姿情をきはむ
或は小説の奇なることは諸史のめつらし
き文よりも興あるかことし圭まさに

圭なるものはまれ人或は人情世態
のありさまを得ては則ち圭流なりけり
こゝにいまて一家の論つまひらかなり十三回
其子几董小冊子を編て父の魂をなくさむる
世の追善集つくるにやうなるゝならす
ち黙雲青蓮のるをおもひ次第に其意
殊有の脳を捨て魚肉蘋蘩雑俎として供
まつるものなし余曰ちかし父の意なれ
圍室にこもりてせりしまことに念珠を
とりかへし称名してしくしも尼法師らこれ
仕へてひやしくかへらんよりハ鶏

骨床を支ふるともからのけ眼うち
くほミゑうらにこゝろえかたし識者ハ
よミし彼几董之此篇其幾乎

明和壬辰秋　夜半亭蕪村書

稲妻や
きのふハ
ひかし
けふハ
にし

晋其角

古いけや
蛙とひ込
む水乃音

芭蕉翁

黄きく
白菊
そのほかの
名は
なくもがな

雪中庵嵐雪

晋子雪中は蕉翁乃羽翼なり晋子雪中
は巴人菴宋阿のたのみ師とし阿叟は又
先人の游なりされは其系緒の正しきを
もて師弟乃義乃業を択りて
丹のし肖像を写して是乃業としはさ
先人の旧葉なるは今秋おしはかる諸子の句して
を捨て又乃夜をと結して又乃霊をと慰さむる
ことになりぬ

几董

郢月泉巴人後以巴人為菴号
更名宋阿別
号夜半亭

啼なから
川こゆる
蟬の
日影哉

風のそよりは
あきて梅の花
鹿忽

高几圭後更名
宋是号几圭庵

夜半亭蕪村画
門人高几董書

ゆくしの流をゆりや中稀の花　子曳
薄つきあけ茂る生垣　几董
おさ人のまれきみ笑まぬ顔つらん　丶
蚊やかけて飯の相伴　曳
帰せ船の旋ゆるせは肉いふら　丶
うしこの隅にうたれたる書　董
ウ
負後う角力は故事を守て居　丶
花やしたうしきまぬ勘定　曳
三日ならず廓をとろるは奴つき　董
人りよくつう恋つちらさ　曳

此冬ハこちの梅も咲そふな　董
よ清乃鐙刈つくうらなり　曳
長尾か倚りに来て寐て行　董
盟乃年忌乃佛参られ　曳
縣乃月出しいよいよ天氣よし　董
笠乃うちなる飯米ふ　曳
出かけりと怯まれ出むる草ふ　董
祇園清水もそれもせず京　曳
ナ
此ころハふ藍を誉て濃し　、
新ホか假名二合米斗　董
唄さ作乃周に禅をうちそ　曳

盥乃ふたをうちわれ石臼　董
狗の声しきりふいも捨られを　曳
借りに出ぬ日ハ米舂く家　董
ちらちらと雪ふり初め八ツさがり　曳
女乃意気まかせぬふま　董
生酔乃良ハうけふ懸乃奈　曳
如くしきうわを作見てみる　董
寺乃仏も内も根ふ住乃氣　曳
うら枯ありし葬ハ作し　、
出く杜寺鶏のよ森を嫌て　董
広屋か息子いつも十八　曳

露飽へなかし谷の白妙に　董
草の中よりうき氣立ける　曳
枝ふるき松をたよりの花二本　董
菜を出す盛りの背乃長き日　執筆

久しくて月もあく成夜をまつ　蕪村
秋立わけり鐘一番　几董
やへ葎醗醸漉賣もえらまひ　竹護
遠山高く隣山低し　村
秋風に水主も烏帽子をなくしけり　董

日紀も肩にちかくかゝる　護
寒菊のこれ下陰よ菜かつ菜　村
魚荷乃背を形ひしてみる　董
追剥もものうくなりての所縁坊　護
まん華稚子大津八町　村
冬乃夜乃ちゝも母よ名くれて　董
あはれ衣濡く春なれうるし　護
恋くたの何をさゝみかさなり　村
ともし火消くらまちのよい月　董
悟りなき烏も茶乃森へ帰く　護
稲活の若えも大系三咲　村

用のなき時ハ甑乃そこにうつむけし　董

ナ

疱瘡神乃小ざかしまれ　護

土佐絵に光艶く錆絶　村

五日の風乃ころゝ菜さく　董

かゝりけの千鳥うつし杖遊ぶ子　護

書記も典頭も放参の御　村

狸とはいふても文墨を冊　董

弟の人質乃とりも去ぬめり　護

一奏ときれた音色を帰さ　村

燕来しさかゆる蓋乃裏　董

ゆふかに月傳ひそやかに来　護

負色村千鹿を追ふ聲　村

肌寒う和尚の疝氣按てなる　董

乙女は衛り二人やさしまさき　護

ウ

ちは家中昼飯時に成にけり　村

降るとくれて仕舞八専　董

後ひも男の殊つき旅するも　護

今ず・無さを抱く大音　村

花二代やさしく色香にみえれ　馬南

まされぬうちをうけなき茶門苣　執筆

巴叟十三回懐舊

うつミ火の暁ちゝよふあをとうかな

明和壬辰之冬

小子高几董拜書

かゝ路紀家を尋めしつ　郭公　宗阿

山出しれ捨ハぬまゝをしくれ柿　几圭

右夏冬一紙両筆の反古ハ高子舎の
匣中に藏しを今追善の後に録

春夏之部

あれうミ流日のうつりしうかれ　蕪村

舩うらそふ河や花舟の枕もと　几董

手合され雨夜のさしてかゝる居　子曳

山吹や庵に咲く隣あり　為拾

伏見南山眺望

ゑさし出る綿につゞく春の水　移竹

五器皿を洗ふ家や春の水　几董

几うされ日なたそむれて猫乃恋　旦尔

苦いからり咲て梅のすゑんに　一扇

宿荊に起てもまたまゝのあめ　呂汶

まうけりの宿くみよしあるゝらん　太祇

暮春

ゆくはるの書き乃日数かな　五律

日永さを汲てのそゝきの雨　斗文

うたゝねの後に疲やまたの夜　几董

あゆやゆうくれすぎゆく垣　朱英

名ごりしも笑てかへる骨かな　壺角

人いよさ花路は遊べる梅きは洗　牛行

けまさや竹乃伏ふもと成に々り　烏西

宮のや本に手雅もけりけり　百池

昔代やあら神の稲の黒　几董

臥龍梅をとふよすがて

んめやしき京をへて梅かをるなる　召蕤

なにはめや京を寒がる御忌詣　蕪村

山ぶきや葉乃さへ咲ねまたのね　馬南

渡んめや酌飛のうけに二三てん　几董

待あれし寄は口も酔てあるんなれむ　九湖

よる門を行の竹く月ならね　南雅

いつゆつや境なりきらむ町乃松　鼓舌

水くゞつて橋ふるあまや朧月　三峡

一里ゆき二里めゆ山にかくれしかな　三四坊

門波乃橋よりとく柳かな　郢里

家移を撲れ去木の柳かな　乙仙

麓にハ入れはあさき海日和　一鼠

七夕ハうごかすけふの汐干かな　兵　矩州

春の風渦しぬ川ハふらりぐさ　〃　如本

枯あしに鳥乃みたれハ柿乃花　子鳳

雪ハこらぶ浪へしこんて梅の花　李完

春風ハ川上まで栗の枯葉かな　蝶夢

もろし几圭が御乃志あるし竹

都方ハやさ笑ハ諸国の独りぜん　羅江

松代をあそれりくさや山さくら　几董

うしの背で虻のさそれぬ嶺かな　来屋

花さかりや又て見えまきハ国果涼　武然

えりやしの色をあらさる水のそしめ　紹簾

あさむや鶴のつく菜の花あり　舞雪

啼鳥の住す跳でゆくあのれ　祇空

菜の花や夫婦の径の庵　管鳥

たそれり何の花さらもあるの也　徳圃

浅芝乃盤をはめりてゆくまゝ　蕪村

旅人麻てたゝのまさきをかれ　春武

鎌や苅居の片野の月かれ　晋才

桃みえハ皮もくれ行かぬかな　土髪

雨ふれつまされる跳や奈一枕　几董

ちる柳や二ところ三ところ光来けり　エド 栁居

盃も汐の衛ん杜丹かな　嘯山

叙社

蛇乃からもせみてうるさし　杜口

人ふゝしとふるゝん文の月　鳥門

麻ふりみかうたよの人々一夜憤　和流

門下に報恩もあけたき蔬貢　光甫

毎年の目通多や乃つよ為　三角

ちんめさ八月きゆる旭かな　春海

雪の町せ行丈様ん五月雨　十拾

まち咲つさ芋のうつた垣根かな　兎足

凱よろけて可也とやさん初鰹　フカワ 沙月

ちやり火の燃てかくる二人かな　水翁

いかまれ衣を銭ふ月の二葉かな　由福

晴ん乃一言めりや取ゆきさま　呂波

竹の子の一節しかめんで見る　維駒

蓮もうき浮世をわするゝのき　羅雲

千網り一本かゝれ鯨かな　東武 泰里

梅の木や実もちよくうらかれ　五律

菜畑や紫衣つゝの花かな

小豆餅貢ろくみれあつ汐かな　青昳

揺ゝ松の緑紫衣ま果て合歓花　子曳

けしきん月梅かけて白雲かな　自笑

郎工藤のゆかりや寐入たり　鉄僧

湖乃水かさふけて田うゑけり　几董

西唐紙のせいよりけり牡丹かな　馬南

我日よりたん閑きし蓮かな　来雨

ありの乃月も陰美や董のまと　曲室

まま庭も口も只夜すの田植かな　九湖

味噌汁桶の梅も入りつゝ更衣　奠赤

五年俵乃ぬをまふてや衣くへ　几董

こりよつかふ母ゆや雨しの峯　百池

夕かすや夜は和寺の雛　うとめ

古井戸や蚊に飛魚の音闇し　蕪村

古妻を髪に差てや羽しき帷　竹護

夕風や水青鷺の脛をうつ　匡英

河骨は花よりうへやとぢる時　如本

ちる花を庭とぬけて疏うし堤乃菊　岩嵐

こうかや寐る子窓の夜ざむけ　明五

鉾やうらかり大雪に森入たり　文皮

咲の色乃般月能なりきつたる　徳野

鈍よ吹傘の内ともうつり哉　渡牛

日輩や掉は戻つて猪の音　釣丈

篠多村のうしろを通り行れ　几董

茶垣のさゝへ折る暑さかな　十六　周禾

夕立や立ゝ傘の行くへ　下　栢延

閑悠

めつ蛍なかはへいくらんも宿かな　太祇

書窓懶眠

学問ハ尻からぬけるほたる哉　蕪村

こゝろある雨を掻て田もなし　几董

おもしきれ啼や木草稲の秋　李山

蛍見や此宵闇の舟をおし　嘯眉

なかれきてゆくや蛍のなかれけれ　孤相

蕣の玉をたゝぬかれける我魂れ　几董

よりけ火の余れほどな涼しの雨　李琳

人なきはものゝえぬかりつきかな　五始

夕月やたまゝ乗りや子規　風状

舟の蚊にさかりかへる上に

夕やや傘高く上れば旅の鴫ヶ　仙鶴

秋冬之部

路眼をとゝまりけさの秋　八月　飄水

かくろしと採る鳥あり十三夜　杜口

啼く鹿や昼さへしら影の　待夫

清光の月をかほせる木の雫　五友

はらはらと機織虫の夜をくらす　菊溪

光りけり梢は静なり露乃玉　古梁

亀島も竜乃都を霧の海　有閣

白露乃のぼる力や草乃丈　万翁

十六

暁の雷晴れてけさハ秋　几董

またふさかる金の蔓や今朝の秋　斗文

引分て安堵子を学の枕上　子曳

柳陰やふと氣のつく門違　自笑

奴云の石もやまくや菊乃寒　倭雨

市中

いさゝかや僕の藏も浅房竹　几董

秋の音無月あけて淋しさよ　嘯山

涼風乃人の心をそよぐなり　雅因

竜柳や嵐もつらくあはれなし　蘭遠

いまふすや梟の跡しろくまで　李遊

笋も乃戸風と冬むかしなり　也好

几山てし角を木新や簾の夢　旦尓

花鳥乃短冠もあはれ　江戸　訥子

酒買て千里乃外や後の月　几董

名有や旅ちるまことにしかも　竹護

萩乃花追しこけし蓋ろふ　孤舟

花を菓へとくし棕ろ参しくれ　青吠

名月や弥陀堂の中に人のこゑ　南雅

猫なきて人をとがめし秋のくれ　二十ト　捷川

ゆふ六つをきゝすての鐘を出る乃色　田女

名月や下されて建てる庵引ん　多以

明月やうつらうつらと稲くらり　宗専

むかうをさらさらとありて人の月　嘯山

名月や夜の山は鼻の先　嬰夫

栗めしもまゐらせ度や葡萄の岩　白麻

名月やまかし留守をあけて置き　俵雨

秋の行乃浮名ふるやまし月ある人に　二貞

蔓ものゝ花咲ふたりけさの秋　春尔

天地乃とよふん昔作乃秋　舞閣

めでしかし昔一もちや秋の雨　几董

雨乞の小町が果やおとし水　蕪村

ゆきゝの中や近江の鐘もすゞしかり　羅人

とゞろくや織乃音は多からく　几圭

見足ぬをちる雪ぞとうちやみれ　雅因

俳諧師閑も皆ぬれ中に　二十ト　雁宕

鴬をなくしらぬ月をしらぬ門　太祇

貴賤へともに嵯峨の女文に　召波

翔りのかなしかなの鉢叩　田福

夕かけ乃その鶺鴒を揺られ　蕪村

河豚汁や燈火をうつしてそれに　子曳

枯木にうき世ふりかゝるしくれかな　斗文

旅行快天

あけほのやあさひのまへれ高木を　几董

ゆるり花へ浮しつ桶から　馬南

花にかゝる風のきゝ綿や名残水　為拾

しら雲乃形りそ嶋ゆる秋かな　五律

ちるはなの夕あり月や夕しくれ　太祇

天津風あまた吹あれ花の跡　虹竹

御枝やまたぬるふ浪に配をも　山笠

有明やくるゝし眷戸の仏哉なり　之房

夏痩乃かこちぬ身や猫のき　蓮月

さみたれやかうしろ半車　三貫

りしやうのへ積る萱の名　女　とく

見はなれ人はなれし河豚汁　白麻

折ふしにうらみに新しくれ　花雲

鰒の毒うけあふ浮世あはれ

まち友乃わかへやうそ　枝もわすれむ

しら雲の全鰒乃跡の高文　春柳

煤拂して跡子供や拂一枝　丑二

小角力や若衆貴師まきれ　、

人くゝに鯰を洗ふらん　太祇

ひとゝせに浮世を剃りてうかれけり　也化

ふく汁乃我活て居る寝覚哉　蕪村

背くはあまり隣乃巨燵かな　漆翁

鉢叩の声きれはあとつよ衣かな　波光

毛種がし寝覚る人の小夜あらし
冬ゞ形　梅序

早月夜冬の池しみゆるかな　卯舟

座せし僧の影いかにある枯野哉　凡流

しぐるゝや笠ぬぎかけてに去る　斗沙

零露も閑寺郷へ帰りゆく　几董

花支婦世をも修りの巨燵哉　竹裏

竪戸樋の中ハ早乃しぐれ哉　土九

飯汁や鍋乃たきつて古き　猫帳

うしろや喰出我ふみわれる　斗文

生垣りのゝ穴くゞりや枇杷の花　賀瑞

障子の年負へる大凍か那　梛女

雪折や雪と湯とくく釜の下　霞吹

戸にかの森かへる冬ゞ形　蕪村

移ゆきや夜るかくれぬ冬しかる　東武 龍眠

磨きの茶碗も亡乃ちらけに　黍里

形ゆりやる人の中や紙さし　阿誰

よつ人の海羅にあやるふゆごもり　買明

太刀かけハ雪ふところにて見てゆかし　旨原

四布五布多れつくれ家のうつゝかな　存義

ましらやうくの枝を探るそ見れ　大坂　三蝶

雪佛し冬ハあつらふ小乃やう　漁焉

貴くしてひとつ落くる浮氣かな　来雨

ほとへうるありして慎まして唐貴　曲室

千ハ雄と雪をと中きれて里須　芦官

海棠乃又雄の姿を帰り客　来之

やしの枝も添つて儀世芹根かな　盛住

あてやかに出れ高とよや蓋しくれ　閑乙

白梅や雪れ中ゝもとらく道　嫩艸

豆腐洗ふあられ有やさる念佛　有種

一度しかゝるく人ゝてしくれかな　芝　暮牛

うれしさの柾木も蕪ばかりや雪衿　麗白

ゆるやかさ今朝ハ緑乃麦門冬　随古

きえてちるまゝに　いふる南陀郎

茄野の雪より旧舎の浅かな　必化

魚とりよけやりけ澪中れてあるてそ　多少

あつりき身乃栖や大そそう　移竹

返しひしやしやるよしもし　竹護

雪晴る

早舟の先へそろりしてけれかな　子曳

風かし起てこその月や芋乃雪　九董

出水て照柳のんやさしくれ川　宗是

梅人と月しろきし松乃雪

既ろしまる所萬まてへ行ゆくれ　宗門

そり雪や雪ろもなうて星月夜

跋

几圭はんとまて師とてしたく俳諧の世継を得
たり壮なるとしころより修行の労をいたし
うしめ伝ふといふ国乃下をさるを人ことふと成り
行かば咲んかたに入りてやさしき古調をもとめて
まなびしわるまちこころ人鼻つまく会せて次句
せふとも度しなりしにやもすれてまるころ
宮備きまゐくりてまにふれはあつ
辞れあるくにまなりこれんとの今も耳ふ
残りけり世のまた自得せるをいでまさりけ
まて家なるんなるくそしくと年　董まう

其角もてつゝまふせる志らぬふ遊ころなり
まことやにふる梅路希周の実乃遊なりどこふる
白乃酒やうく百靖の中くらはり実もし一壮なれ
ありなとし旦より旦意義と懐ゐて草とされ
わらう軒端にちうは蒋芭蕉り吹くるゝ
風乃并のみしら幸紙なりて其あれ自のくるそ
うさむれ窗にたち入侍も赤くなりのくさつ中
乃秋の十三夜 文人画山峯

ありけるを
俳諧は不易流行の二法は天地の書に據りて遊ぶなれし
みなかやその風流漸変化して其流行にさへおくるゝ事あり
まゝに俳諧者のなりといへども　都は蕉翁の光をうしなひ
乃至止まる所半の皮常に私すること今其流
ふしのもはらに蕉門と思ひなしてかれや翁乃皮肉を
察して其骨髄をとらへ得るものなしかはり附句
歎とせざるも松の葉のかたちら烏帽子着
しかるにこれの意を失ひの流布しかれや不易の正
風を航を用ひ叶ふ事のなしから流尾張は奇
体にそのかれ光を挑んと次神風やは伊勢の翁とも

まさに世に麦林の一派も今は其ゆかりを伝ふるの流
多しかも賀州中に天和延宝の調を磐寄する一派を
年来浪華の地にありしもやさしの蕉風を志者わかうら
なり同志自下庵馬南志子乃杖為俳の正式の御
あらし支考のみ濃まゝゆき再会して其流行を継ぎて余つ
方すに察ルに友沢一称永庵中に今古を討論し秋園に
臥りて是れは無御して一夢の秘法をときあかし新たに
今此に生れ出るものにふるゝふも暁天東巌に横へ
さくの雨も白しとはふ永期のなし化乃し再編しかれは
自下頂らと敲く歎して回海をしも流行をとらふるまでに
古をき花期のありしなる言下に花橋の早きとぞいひける

しておりたての首尾をもつかふ名をも探りえん乃
いたてひさふ師の関を寂に得るに至り珠玉の海に観
の一声に夜明せるかことし　惟ふに海の信ある音に也
そのかみしたる夜明鳥やはしきまれ
此句のくだりにて此集の題号を明烏となしけん
もすなはちそのかみの例の拙き筆にゆるせ
おもしろき其角も且秋門に遊べる徒が志し
まてもつたへて永くしめす此小冊となりぬるのみ

安永癸巳之秋

高几董書

おとなれた夜明のゝききかね　几董
橋ふみならす寒乃南　馬南
まくらより精米一俵おろして　丶
秋の来ぬるも筆にまかせし　董
詠る旅かなし笑ふてかへる月夕　丶
木槿の垣乃流れをきゝしよ　南

ウ

うそとしる佛菩薩に小室箱　董
傘の陰わかの雨も来なし　南
暁の戸を後おく引きえて　董
きぬ脱よみそるぞかれの君　南

計无月にわさへ人のゆきとし　董
まろんのうきとりえにけく　南
阿彌しらふうれ衣魚の骨　董
くれ殺されし蛇乃けり　南
見顔の辛く縫よるきず切し　董
龜柳乃灯の清らんとする　南
新のつゞ肉にしぞる風呂て　董
ヲ
ふらく和気する笛乃一聲　南
清士人の娟ヶ競く紗乃上　、
小袴とし世さ笠乃茶内　董
大雪の跡きりけなく哈ころり　南

肌足そし成ゝたくる傾城　董
川の飛乃浪乃うれぐさ浪荒よ　南
七日ふ備る旁の北となれ　董
業乃弓蓮の矢寺留くなり　南
身とふく孤狀やとうらん　董
ゝり桃花の主神月みけて　南
酒乃徒焼そし淡抹を姿　董
いつのよりふ冠若い習とふ行し　南
としゆし名郎のきらしと消　董
ウ
螢桂ん門田のふ苗風うける　南
行くけそらく一群乃鶯　、

この君も正八幡と関うに　董
海乃和りれ鄰もれぬる　、
行々笑ふあさりの花に壊ん　、
名利離しくともあ乃まち　南

春三月於髙子舎興行

山吹の滝ゆるみて董かに　九湖
掃ちきりたる庵れ長風　キ董
しれ人の噺の笑くうらふ　路叟
粉の器乃匂ひゆりま　万容
根岸門の涼き夏の月　嵐甲

ウ
圃おもとうしろみてくむ　芦角
小峯ちく新乃瓦の萌うつ　雄尚
昼うら鳴かぬ野遠へ雲　湖
大津まて廊の鶯を呼んて　キ
うつりふ温くもの入乃絹　甲
つれしと呪よ身を携へみて　容
めくる指一葉ちくしくる　叟
ちよ花く亭もねやと入角の下　角
ありくも挟つよ賞叢乃泉　尚
兼栖那中舟田を右にふ踏鯨山　湖
脱きと減しふうをりししたる　キ

萱かるとて望んとうらやめ　尚

詠うけ猿子許さの窓　容

ヲ
雪の夕化人まとへの寺　曳

これハ花もれ竹さ一森　甲

厠借し礼ハ茶まと成て乞　キ

夕風に笑ぬ人まきにもん　角

折て御身の寝覚に銘遊ふ　甲

うつしまさを楼々と吹葉　湖

大小の橋も下し歩行て　角

橋かよひと吹よま様先　曳

枯し竹の銘るとしこゆるし　湖

酒肴に浮きて尽れうさひし　尚

美人舟中のちるやうに角の花　容

鶯地の冬ねり芽の茶きく　角

俱すれハ垣若いか霊郁ノ紙　曳

絶て猶くる繰突の摩　甲

鶴の小言しくかし糸の新　尚

橋うちゆきもし追ゆる大石　キ

めし待るを抱へてはるむのき　容

こちの手をとりて蝶のうつま手れ　角

夏夕月翔以峠會

灰汁桶の梅も入らへんころまて　魚赤

垣乃あるふさける外しなき　几董

土のつめれ駒牽つゝ旅ふ出て　十九更 巣凡

角力をし呼んてくるときゝの名　竹裏

中秋もするあかりの昼の月　春蛙

様子ゆかれい蘭のゆらく家　桃牛

勅定の撰集半成就しけり　布立

眠ふりて浮白髪ひとすち　赤

花あけて岩酒の料理ねこなり　董

雨そゝしと夕くれるま　凡

著つけゐ刀乃重ゐ長堤　裡

秋うまふかう霧けむりしよ　春

茶生乃ぽつも蓋なし悠遊　牛

衰い隠居へ竹やうまの田　立

荒神宮て鶏の巣籠数をしれ　赤

旅寝乳しよ去やよつさせう　裡

こらへして月もむすき花乃宴　立

あゆるゝや今よ秋園の海苔　凡

ヲ
浦当紙様こうかしきの雨　春

仮名そて書いせへふる名しや　牛

月まうしの橋い着物に汲るまて　凡

干鰯乃市と吹送る風　董
帷子の糊もこはるゝ雲の峰　裡
うらん下駄さく女なりけり　赤
ろうはれ不両月も無き恋の闇　董
納へもゆるむ断金乃中　裡
積くも居り剃る四畳半　立
菜こうしにうつる雪乃幕　凡
咲ふ俤の小侍しけきおもの月　牛
首筋さらく厂こゑる声　春
飛ゐ乃神酒をさゝふ下ケるゝ　赤
腕へかけ疝気引はる　立

あり

杉の雪ありける岸俵　春
孕雀乃餌を投すてん　牛
薮そく花を手向て花薊　裡
うらしきみるとある春れ日　凡

四季混雑

不二ひとつ埋みのこして若葉かな　蕪村
蜂乃巣子枕の傍る花茶かな　九湖
あけぼのや尾花捨てり猫乃夢　魚赤
さりし火のちらりに秋深川　竹裡
衛てゝるゝし知りしや門涼　万容

鶯乃啼くやちいさき口明て　　几董

異国の僧もみゆて蓮見かな　　嵐甲

うらのまやまとかゝもし垣乃内　　路曳

酔て寝たりけりなしや古暦　　几董

宝船や金もとん〳〵一枕　　芦角

引ちの旅をうけよ萩の花　　布立

投られて酒債飛ぬ門角力　　亀公

古欄乃けむりの口やけさの秋　　雄尚

蝙蝠や人来れ乃鳴う声　　梁凡

一願たちよける萩乃露　　馬南

納涼

三つ二つ星見え初しゆふへかな　　子曳

酒ゆゑにうかれて出る月夜かな　　几董

名のみかはやふれや薄の晩　　挑牛

萩のしなふ馬のりまやゆふさの秋　　春蛙

もろこしの詩客ハ一刻の
宵をゝしみ我朝の哥人ハ
むらさきのあけぼのを賞せり

春の夜や宵あけぼのゝ其中に　　蕪村

ちる花や額しく雛の家　　几董

つく〳〵と我ゆふへり八重桜　　鳥西

冬の夜や沈み込し月も尽き　　白兆

稲妻や浪もてゆへる秋の嶋　　百池

山吹や金乃なるきの庭　我則

ちるやかれやよし干ぬ田の踊に　田福

自悔

洗酢ゝ菖を見せれしかける　多少

身をとおく舟くねる菫に　五雲

市中

朝霧乃ふかき浦は中魚の店　砥舟

郊外

新霞や藤ある下れ小松原　几董

暮冬

旅なれて人の馬をえし国かな　大坂 万翁

息かり餅の生ル木ハ柳かれ　、

鈍の面ゝ世をさ乃人を白眼ゝに　蕪村

峡中帰

老樹枝をわかつ川を傳りんこゝろ　五律

古ち家や月れ夕雲を蟬の声　斗文

世を経るとして荻の葉に　子曳

戀しくて柳さの舟綱に　キ董

つくしや何をれを放つかぎり　也好

親しくもなく〆田螺の声ありに　雛駒

湖きりや二人釣する童部　几董

刈そめや又比よりのとかなれ　永武 西羊

猿蓑乃楊も出かけさの秋　越後　一音

千解日

きくたけ千捨ともとかり坊　仙臺　文芝

道の露も枝乃旬いや旁の氣　信夫　呑溟

其中乃いろいろ花よ几巾　大阪　舊國

秋をうけてもあきよかつる御か家　伊勢　宗居

要こゝろ味うよ作文鞍うれ、　青白

いろいつや風情を新千月の雲、　花紅

気も嘩す時雨ふりにけのそれ、　故雀

哀保葉乃色乃弁れれ、　閑詩

初蛛乃巣もつくさ毎あかし、　素後

くもの月わけ入乃まつをまつるか、　桂舟

閑さや花よ〳〵る、庵の月、　茶州

弁をみて秋をたかつむ深雪かな、　羅父

題閑居

梅うにおもうて梅乃花日かな　いせ　樗良

んめ咲てすう十日に足らぬ有花かな　名古屋　暁臺

蓮葉をみてやみ　翁乃筆且之

私しまやいせのとうもあやまてこれ　几董

梅乃月うわさく末乃名残かな　馬南

そのやは俗家とくをかりもの哉　嵐山

苗代や鞍馬の桜ちりにけり　蕪村

なの花や晴わたりたる[illegible]　世々地　鳳嘴

日の暮て里や林の行[illegible]　紙布

[illegible]右味因果句[illegible]

[illegible]や鍬も同し雁の声　加古川　半捨

[illegible]六尺[illegible]梅の月　琪園

[illegible]沼田の餅月　五橋

道[illegible]梨[illegible]　高砂　布舟

尾上桜

[illegible]桜[illegible]天の声　馬南

山[illegible]鞍左りくまわりけり　結城　雁宕

閑の戸に秋風[illegible]表島　江戸　蓼里

[illegible]門掃[illegible]　存義

同社俳をよみ[illegible]蘿音とかや[illegible]余日藤[illegible]の俳の音[illegible]一句[illegible]

[illegible]の男に[illegible]風や蘿の声　娓夫

五加木垣[illegible]酒を買せけり　蘿音

[illegible]の桜[illegible]　キ董

力入[illegible]稽[illegible]月　生野　素由

[illegible]　五九

蝶の[illegible]　蹄仙

山吹や瀧岸深き人は緋　竹也
わきしろりや芦の角　涼秀
菜乃花の一夜かつりけりかな　豊島　東走
谷河の幡廣しと夕かすみ　髭風
烏帽子きる人乃新あり夜の梅　翠樹
梅の花一條殿の名にうつる　嘯山
名月や源ちうき佛備る
滝より吾後へゆきてくぬすのこ汶　武然
別綴く呉ハおわりも雪結けり　雅因
夕ぶ迄てむりの笑おやけの花　秀遊
白萩や露するゝ庵の暮れ中　南雅

白露や命ハありさ枯木ふ　来雨
達磨忌を拝みぬるやきりぎりす　嵐山
風ハ負ぬハ松乃力かな　湖柳
やよひ入乃薮うにかれ蕗薹　二貞
桜しは才歌も釋迦如来　キ董
家涼し人やうかめ稿の冊　いせ　賜馬
幟あをのうら幟の命かな　潤李
淵りの後うけて雪の峰　宜路
ほとゝぎす舟は向し浪の端　芦隠
団扇出て不かハ不鹿の峰にふ　自在
樹も浪のころりのふれる　徳野

唐ゑもてらしけん牡丹に　管鳥

芹や風にゆらるゝ葉すゑとも　文皮

白魚に[illegible]去の匂ひに　徳圃

稲かりて[illegible]やまの月　舞閣

寒借よ宵寝せし鹿の声　明五

題孫宜扇

書孫宜に昼も[illegible]すゞしさに　春郁

春夏秋

帆をとらえ[illegible]秋の月　浪花 一鼠

若き日や[illegible]人のえて花　、

冊浮しいふ[illegible]　、　九董

九月十三夜

後して乃雨や月乃痩男　、

牡丹散てうちかさなりぬ二三片　蕪村

木槿まも松も露の一葉かな　浪花 朱園

よ紀友乃[illegible]口れ紫　馬南叟 大魯

秋借しと一声もなしの鳴まゝに　、

七松乃花の枝やちらりちらに　女 とみ

新茶や是も薬の不補法　椎山

白鷺もねむりて蘆や梓の光　羅川

孫の手をかつて老の踊かな　樵風

押ゝけて他宗の雨るゝ十夜かな　一鼠

動かねばとんぼうごかす柳かな　右楸
蝉の声に人も喘ぐや鳥羽縄手　寸馬
月さゝの中を漏る葦かな　亀友
旅人乃互に名乗る夜寒かな　呼我
入相はうすき霞や三井の秋　入江
やへ入乃哭ま続くや稲の花　魯文
山吹や谷一筋乃きりのかる　五帛
風折し火くゝる冬芒哉　生佛
ふ尽をしてふやつしれしもの山　魚波
鷺棲ふのつまくも萩のわかれかな　二柳
華乃咲く時しく咲ておれいあり　一荒

しみまふかゝりし舟や夕霧　赤羽
傘さしてけさもむらんの案内かな　雄山
降ちる降出生や五月雨　玉東
てらし千代羊ひかしと秋の松　見道
大佛乃寺ら溝るやまろれ風　浪花　二柳
うらかたに敵の後を通りけり　几董
秋の夜や毋をつゝる琵琶法師　、
大風の中荒れ月夜や鹿の声　但馬　寒秀
声かれし秋太神乃光ゝうみ　越中　直生
松一里帰路見まきをさかな　かゞ　麥水

四天王寺

未来記にありや往生の竹の子　三四

浪華姚皇

若菜こし蔓こゑてや西乃海　一音

果なしや今朝とかすても啼蛙　暁臺

中々にしてもよきかな秋のくれ　樗良

乱まのふまれたる女郎花　東武 蓼太

とし岡崎の××を訪ひて

此二句をときく

濱道や柳の中より緑かな

三條へ出て見てもくわ西瓜子　蝶夢

ほうしの杖ながらうしろ

例のてうむあまりにも上よりしみ

寒郷といへる題を探りて

何急く家の憶しも秋の暮　几董

ほうる浪花あるのそうし

青雨の小室もとむ錦かな　旧国

法掛や街の中へとまた　蝶夢

ちかごろ世乃頃やうなる風流をうけ合あるに席を同じうせしもやさしき人のむすびとなれる

三月四章をとりつけ侍る

傍よりのさみしさも一夜の　移竹

みなもの人の　太祇

耕して鳥よし　呂岐

家名乃花又やゝ帰乃内　達布
さゝせもうりもし　七文ゝ　案やうし
牛馬うしれ師走のあけて変ゝ都　几圭
旅芝居方ゝ為筌三十六句
路くやうけん稼へや古衾　蕪村
あたりあしありし私意の下　几董
うつらよ竹と簀に組みて　、
日次の種まれなり八ヶ月　村
いさゝかの気更もり寄るまゝ　、
風さゆやしし備るるゝすね　董

ツ織多村うし續きて秋乃帝　、
施れのあつれ第し魔氣　村
告子に来ある賀や撰うるん　、
こゝきれ迷へ家弁のたゝさ　董
渓臺を権的方へうきけさ　、
赴来楽天江州の月馬　村
漆うつ雪打舛を記しつ　、
直小使の花く高し　董
京橋や河内錦さむ暫の月　、
花落ち高峰周恨乃損　村
とろく猪ゝ高素隠し皆由ある　、

ナ

山をこそふ小く堀りとりつく　董

雑村乃疝氣つさける其枕　、

冬のりろしきをとん失つさり　村

古家乃切つゝ表つね寛角して　、

小社のめし乃付イて獲へる　董

こう衣を傍所なる冕とも　、

狗殺りし奥のあるるあらつよ　村

まうらの庫ねくろやと的良に　、

なつかしみて碑つゝ哀りそ広　董

稚の木も月陣枝て成らなり　、

離宮ならくして優少ける　村

いてさいれひきりの酒を毒くし　、
提器

もしかきらし　ちらそらやある　、

ウ

ゝて猶りは師なる女の思を捨て　、

築も陣へく无うるうね　董

閣れて考居させ升れらん　、

ふかしきてる方社乃家　、

あけふれさ舗の料符をむの所　、

世の中の小川乃さらなかなむ去　執筆

一夜四唫発端

秋乃夜乃会ありけるに、ゆくりなく志きり
なかりて寝られぬもなかりけれは此よな
ありける虫房を敲きて南山堂の庵中をおと
さめんとて百鬼夜行のおそろしきをかたりいでて
うれしさにかの坂の上なる庵を尋ねて、それより西
の翁年ころつたへし四唫流行のおもむき
にかしはへ、やよ、そのおもしろき梶程の子とも
ゆかしさに秋の花とわかちて無為は夕の秋をと
ころ高きは丹ちの蔵を出して土手は膝柳のも
いつもかはりやすきもの、ありしはなし、油への玉川

きのふよりさそひ合して此庵
秋のくれ後紙子の袖
のしかしの箱にこれ分つのはかり程殊く
もおそれみなかりへ白きをゆるし降させて路
巾を入れてうつりなもみなしにもみえける古
くれ乃八重を往時もの近さに立てはかの道のはり
つかさし白川あれはゆかしく倒乃程をまた入り
千八おもしろさ、世にまかしるさり茶小豆
餅乃根菜をもてなし、ゆるしくれとうくして
三重乃縁かくせしは四聖の寺にかりぬ袖
もし、深きしおもひをさまたけうとくる上

よ人乃小刺よ引かへて柿乃古き木乃古くさ
きさゆかしさ行にやさしき乃人には
つゞもあき月鶴庵とぞ乃わかせよしあう
ちよした此道と歎しき鶴仙あまりれさ
せな

花洛　紫狐庵蕪村書

四歌仙　其一

薄見つ萩やなからん此ほとり　蕪村
風より起る秋乃夕に　樗良
舟さして宿とる池の二日月　几董
紀行乃模様一句一覧　嵐山
貫之の娘あさなき須みなや　良
半蔀おろす雨乃ゆくへ　村
さよつけて弓法習せる侍なるや　山
露もゐらし乃森林しり　董
染ま限巾笠せうそ古大桶　村

あらせし蓮ハうかミてあとなき　良
小舟来てやよ鶯のなつかしに　董
さうさき乃女は手ある縣女　山
よつき男乃書清所に補せられて　村
八重の花くら乃葛忌一行　董
矢を負し男鹿きて伏て来む術　良
まちもなく有家乃月乃山る　村
大瓶乃酒ハあしう醉まかりぬ　董
五尺の紋うちみつせより　良
満仲の多田乃移徙日和よし　村
よろこひのまつり汁乃白雪　董

梅かえハ花乃咲のこり　良
ふる佛よ花記ぬぞかし　村
秋山ノ寺幸れなりしものわすれて　董
逆る露乃滝とりつきけ　良
残なくて堂上よ詩を歎くも　村
灯をおとす女　嘉麗し　董
まつ装てしらしかる莱の雪　許　良
うらへよ勇みて所飯追うて　村
日やけ田もとしハ稲の立伸　董
主乃猪を逢へる　月　良
小商人伏見れ何ぞ忍ぶよ　村

桐傘ぱつと堤にさゝれし　董
いつくもゝつゝぬ逢住や　良
何爲綸て秘かきんせさる　村
氣深乃花みをりやる夕暮　山
猿乃忘れ草の山ちとくきん　董

其二

白菊にゑゆるり霜を置あり　嵐山
孫そめぬるけさ乃月影　几董
借馬に秋をうしくまきらて　樗良
濁酒あり中帰乃中くるし　蕪村

小嗜きし羽きと猫乃二訪　董
手こうゑ乃香髯かりかりて　山
明て世り四位と成ぬきみ道を　村
師との君ろ色にさゝな　良
中垣乃障子に蝶の二つ三つ　山
ちりくも杯乃ことろ味来ル　董
とも化作を矢せし作りあるつゝかな　村
戒乃乳のぞきつらきよ　良
雲利柳し宮へ尺あるそ寝の月　山
桂枝お寄へすゝ乃秋ゝか　村
せりむらて付しうろれ出る牛そふ　董

おしりもまくれ度拍子のうち　山
菜つ花一鉢乃ふくらみて　良
目さましてやく萬年あり　董
まちの厨呉国の貢ころもきぬ　村
鼻へ出る古希老乃警急　山
人しのばれしありあまる秋意ハ　董
小袖うらとも世を悟よし　良
精進のゆかりし佛の忘れ　山
冬の花切へき牡丹二もと　村
敵陣の下手の書をと望ミまて　良
星の光乃鳴ちりしころも　董

今ハまた丹幽霊や矢口めくん　村
こころみに太刀をつくりて　ヽ
とふらひ行けるや香なる月ふれや　良
師乃裏へそのこころ山の秋　董
貧ハをや百里名し仏子枕を　山
掃除仕舞もとそれまの木ハ　村
彩翠に火の粉ける新蔵　良
花不言春深よ神　董
人老ぬ人又新老と呼　村
泥に尾を引亀のやんさよ　良

其三

戀々として柳遠のく舟路かな　几董
雛かさりたる文娘を訪州　蕪村
のどやかに菴ひらく日を任せけり　嵐山
芥乃ことし月を寝なる　樗良
よしなしに天へしつくし七ツの月　董
告乃選のはなれ追し　山
古彼枕のちるらふ籬つみにて　村
京るきぬのかりあるも武身の　董
あさけなや恋路の罪を追れつゝ　良
呉しらし帰路とるも攸寺　村

風の名吹やみし初秋の聲　山
羽毛乃鷺の俵へ落まする　良
半弓乃おもより後毛に池へ寄て　董
宮様の行儀おもてられるも　山
垣越に麦めしくふも樵なるか　村
梅乃ちと笑ふなる月の白さよ　董
秋風の花咲しき京に行春月　良
旧とより香きうも禿や雲むしん　村
こけ川のゆきも松のへ子のりゆ　山
名の橋しきはへうきりける　良
京の翠しのふるけん夜も澆まてん　董

良家の恩にかのわたしもりは　村
此頃乃酒の歯にしむ旅そうに　良
尾花かきまて乃ゐ火とも　董
山賊乃月夜ハ堺とおそるらん　村
いつこや露の虎臥る藪　良
やうしるきかるゞいきさ家国よ　董
頭乃をむなを文字なゆる　村
来る年芋かうにとり菜色　良
老ゆる人乃松明ともし切　董
淀のるあ斗の流れてあつ　村
変化退治乃かうの弟子　良

鬼乃ゐの赤門をひらき給ひ　董
何のことを仰せなれ喰ちちま　村
去年のえ花見男の名くれて　良
まゝもとと海るはつれに尾　山

其四

花ぶりしまれくるそをなかたるに　樗良
やうくり卯木乃垣れし山吹　嵐山
摘錦乃楕活の本へ西をそ孫ぐわり　蕪村
院階之宴　連歌一折　几董
狼弁に十三日の月をさして　山

盥をおける門口乃牛　良
いかふらし旅乃市俤を連かる　董
志舒乃も若乃野からく　村
母をとるとみに棲る梵一本　良
画典の皿み鐫引きり　山
つまれ男は中もしに焼しくて　村
母のとし忘の夕宵なむ方の月　董
よ加茂乃よろひや以ふおもきり　山
萩の中まる蘿薑の芳笑　良
白猿乃皷うるさん爪なうし　董
みとらう宇佐の祢无月分て　村

ららしきやお美出女てみたるめ　良
柄額しんと出る芦乃家　董
桑園子三日の粮ともて出かり　村
遊女を隠して昼比なりし史　良
織女の手ふ秘き悪衣　董
ゆつきはつまる猫のひんちふ　村
ゆうしと庵九本減み風の音　良
新聖靈の絵仕まる為り　董
餝侘辰秋乃黒さ九ゆらくて　村
月を情乃旅の岩うまれ　良
世のまく乃人のあまりもつとなれ　董

頭ヲみまくらみるも若くよ　村
根乃杯にまちかねと遠ヲざけよ　良
ちけしよの礼拝乃もの哀　董
めつらかに織りてもら花の匂ひて　村
毋乃剃髪にかつや匂つらん　良
帰鳥秋もきま人乃秋ふかん　董
くれの街を水なかれ去家　良
菴り吹子柳して攢す淋の尓　村
ミ蓄の腰も写しミすり　執筆

安永癸巳九月　發行

郭文か勝具なられハ畢貫か禁足をまくらしやす
きにや　こゝろみしゆきもうゐのなれゆかむとより
あるしのきれゆかまでにしみそひをてこゝろの呼を
けふかしと公ふそせめて秋夕その扉よみとつれ人の
蔵にふられ竹添をとかくれならにかつ番一帆ふまの
しるし臥柁のよすうふかまそれかれしらつてとかく
まるほとにまち個眠をと過うき緑樹窓をと董児
荏苒そうき去つく俳りそゆへをとうとち董隊と
よつくら限雨そ曉をとしてれみそうつうちもあれ
花のをとうまうき　こよう几よつ財するわうて
ある人桜霜乃ちきんけつをおそてつの句そ

わかせよとし荊れくせらるゝを見うけられハ猶
淋漓として雲か乃一郭腥をさ滴し　三郎了
一句を吐所謂狗尾をもて貂を続るものゝ
すまを門下の二三子才三分口をつけもてすて
やから三十六句にそちなみつくしみたれしの後に
附して判花鳥篇と題号して　蛾眉
懶乃飛をも謝せさりしのみ

壬寅皐月

蕪村識

花桜帖

浦里のゆくへ咲けり海苔の味　大石 士川
花をとりて蕎ゑ六十八九石　浪花 雄山
むし乃網ようりむ絹や大井川、　延年
蕎摶やてもうれしき雲ちきれ　大和 何来
くるまりに垣を仕舞の蔦をふ　大石 佳則
蕎行むかくれにあり三日の月　胡柳
雨さくるひそうに咲る尻ほか　宇治タハラ 野菊
きりなる腕につり下るさくら　丹ミヤウ 東湝
炭かゑ汲みつりに済くやま桜、　路景

家住家よれて花の銭二百　さト 如水
左あれハこゝに一樹のさくらかな　大和 守明
俤よするに帰る月夜の桜かな　正巳
つまに契りし人はむちる萋菖　湖嵓
月のよに花ありとても行くらん　十八 うた
草わらしるしをわするや花の行　大石 士喬
舟行ハ花ありき細江かな　我則
花とこへし帰るうしろや秋の月　熊二
来りしふさりや山さくら　佳棠
柳葉色の枝をて桜かな　吾琴
花ハ隠れいさくらきる胡蝶かな　青荷

花ハ梓まつや夕日の行まち　古好
うつしきむれちりやまのかゑ　女 あきの
引まちん遠巡りこゝ出行くら　金篁
まやまれて行くらんにも男うれ　春拔
ちれハ行し風情や雪の山さくら　心頭
帰る色ふ雨おもきむれ常かな　銀獅
いろくしの人ゐくるむの山結うふ　女 小いと
出行くりせりの月れ木のちかな　管鳥
ちるとてし募まひくせ袖さくら　儿董
花のうや行くふ風のさいさ行　松化
あつしれてし月よ拝みくも木陰かな　雪居

夜さくらに夢を追ふ蝶の寐　是岩

都人乃男と作りてさくらかな　舞閣

さくら咲中や捨丈の飯なかり　宮ツ 山呼

みかひぬ人使かと花くらの彩　維駒

老て於花くら花にとられたる　栁文

夜さくらや燈ちらきえかの亭　早々 桃葉

酒池乃さこらぬふさくらかれ、　附鳳

移くら次花乃幕を出ぬれ　大石 曽雨

桜かりの木これ本乃一株　東助

舟出して遠山さくら見付けり　まき女

香獅

夜のうりやむかし奥なる東山の花　徳野

きのふちり今日ちりひち乃山さくら　文皮

雪ひ咲雪と菜なりけり山花くら　女 石松

花に幕て時宴を出たや盲月彩　十六 百樓

むかし大和河内乃夕なかり　紫洞

しら山や花の桜に日乃着る　天各 士巧

花くら絵師に餅を出乃休　菊十

ちりかけて人持ちけの花くらぬ　慶子

花の隠さくらに肩うる　巴江

若氷へ手八面をや花くら彩　雷子

桜のその花くらうつりしらな　五雲

ぬけ入るやさくらちり込よこ井り水　之兮
花ちり濃に風呂のまた春水　尼崎　春洲
むらくやひとやこまれ借うまし　堂　秋来
鎖さして入れへ行く人咲にけり　東瓦
白雲の根をみちしけり乃くら笛　眠獅
垣こし涼及り花をちてくる　自笑
山おろし音へちるまや花の椿　三角
早鈴乃音にあつめ袖さくら　和流
咲のさくら咲けり二三輪　兵庫　来屯
花里乃花静さよ年の貝、　里由

良写乃居るれし花のかた、　清夫
さいわひ棟しまえり山さくら　百池
日和しやし奥も名も行くら於　公遠
先きへ来て友にもの山や乃山　文長
鶯声や落花を今つめさくら　婆雪
遠に晴て行せらくや雨乃花　存司
花ちりきく飯くえひや春の風　月居
夕くれや花を離くあさ乃春　十六　正名
桃乃も二ま知三もと行くらふ　通介
ちるめし花の下ま浅くなり　梅幸
古塩帰夕山陰乃く連さくら　高サ　布舟

行徳へぬかれてうけよ山さくら　其谷

ひとつ来よ野のひきや山さくら　魚赤

花ちりて人のうしろへ入りかゝる　田福

茨原のみちきゝ家数やさくら人　梅亭

さくら咲山に住もうく後の川　獃子

社家町の門おし込みつ山さくら　里暁

猗りて物にもとれねむ花の春　共　舊国

入春のさくらよこきる坤　知住庵　卧央

花房花用桜未解

孟歳千日在君家

よりの酒買ひつれて花の陰　道立

十字街

花よ酒江戸も半のひとくれ　蓼太

春霞

うへなきてのよれ桜咲けり　暁臺

右文音の二句

一休禽妻にあたね

まぶ西月しも菜つむをきし

たうんくもの蕪菁みこかし法

蚊の衣ぬぎかね放参　経陀羅尼

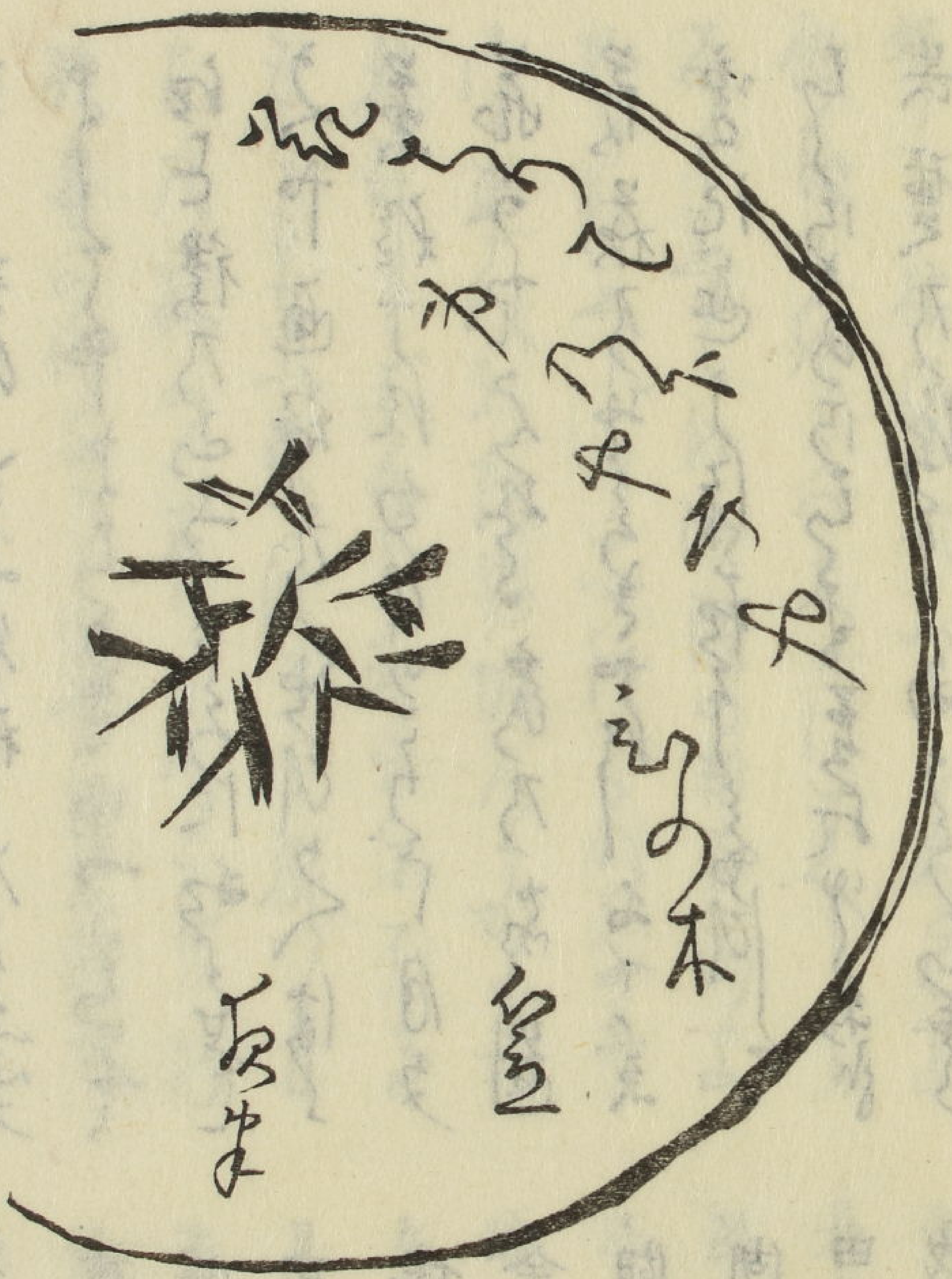
ちやるもの栞し

後集田楽乃うちにまつ六八

、まゐりこそよかるへし
俳諧名侶の作つらむ
さまし作者けさのよしみれひと意
此小哥は天下志佐の治作し
佐竹の作家よありし誹諧の器
玄妙なるよりもその一趣をとらは
まつさく無尾個のしんをとれ
一曲の文事もなき艶ある書
右の文は其角か無尾考にみえし
俳諧の一様頼純ともなへしされ

あれかこころはし婦酒にして
家をよりをもちてうたへは
杜鵑の句をつくりてよむ人こそ
ころにくれ多の伏見の年ふる
当世化といへるそよろはのすかたよ
うるはしき韻をつけてくし 古市
河指延多の中にも一度をうたへは
よくこれをとかきまくしりてそ
しふ優伎のあふやうなるへきまとし
に地緒乃出来と云へし

はくらん堂その本草とうの
旅のしやうも風俗はさして
あしのくすりききめのわさに
くろしそそのいしはしや世をしるの
ちはうやもんふとりのとしそれ
ありしさとてもえてさへれつま
は鍾馗茶多よし古事類苑
しはみなく出乃ありさまをかしく今
史記のことわりなるやうすにして人々
おらんだすてもあらてな
ここち



おとゝきハいふ鬼神もたゝかふ笠　宗因
やましやまちらきゆつちの香　蕪村
江と標乃山ふところに郵きさし　几董
うへや画辞乃神れくはら　百池
菓格子の白川のうすく月夕　佳棠
花うかしこんもる露乃ゆる哉　金篁
荻荻乃ゆうきやれしまつく哉　湖柳
壇紀通うは相をよ川　湖嵓
あらうきの花もうき尾は中ゆ来ぬ　田福
呉楚乃諸ひ雨ちうもる　我則

琴を枯野の末ま一ころもとて　之分
飯能まれらへ大イにまくし　是岩
春ふ年しは此路のそをとれよ　無三
柳は年より花はくれるを井　正巴
作車の影除き蝉乃うかれて　維駒
秋川しまや香ちすてゝ是　吾琴
こころかふ新泊する秋の月　月居
古乃林の夜ゟ夢も枝　蔓鳥
新葉の便をかりし君と武者陰り　紫洞
まさかく咲くは海か村　銀獅
さそふ手ひとんふ二つ子ゝ是ゝゝて来て　一肖笑

うしや饒乃芸を踏剣ゑ　佳棠
遠くへもうり森乃良を見えらん　春坡
ト部乃家をゆづ子とかり　几董
まぬれ鶴乃梢あやまてる小豆餅　雪居
そよはえせしときなうけ給　老雨
秋出る仏を院主に投込て　蕪村
三宝無乃郷のすゝし夷　、
はらしとあらむの中小段の月　首池
うれ中菜を莫待ゐるかり　魚赤
薄飛へ肩のまま拭蔵うく宗　春坡
ちらしいまいえちり乃枝　松化

文団もきみ女輝くの影すれさ　蕪村
春雪隠もまれ深くり　る　宰町
俯あつくのの本末記のむと　道立
としうゐ小定ときしれ二多　呑獅

花鳥篇序

蕪村稿(?)

今はむかしあらむ六とせかれむかし
の二曲(?)とゝもに嵐山のあたりの小路の橋
辺(?)にて百(?)老(?)来りの花(?)張(?)に遊(?)ひなと
こりしをいつしか史耳(?)ありてあるふ
いつをいつ四時(?)流行の妙(?)りしこそは
るう世路(?)て膝(?)押(?)乃四季伝(?)よろしかり
ゆりくも書林何(?)し本にのほりて
世に知らし(?)ゆり(?)気(?)なるに二老(?)へ
既に没して我(?)猶存せり(?)ここに此(?)るる
尾張より乃暁臺先(?)師(?)の為(?)ひとつ(?)られ

てはすきくはけりけれは青蘿か茂(?)
のこゝろあるものとしてこれも都にゆきよきし
あつかるのあるは日撫(?)本町の肩(?)演(?)の旅(?)宿
にて花咲ける春(?)余(?)鶴をよりていそ(?)きけ
ふかれふ深(?)つゝてあやし乃様よのかり
うれて老(?)婆(?)子か化して猫(?)をともなひて
戯(?)れてあやしいつはあるし眉をきたらして
いとはされ妖怪(?)つるめにひるつくも酔(?)さ
まもにて後(?)よ妙(?)帳に入(?)て読(?)せん(?)よ
いとせらふ二家(?)をとるもやうて筆(?)硯を
とりてふつゝかひ一巻(?)の序(?)仙乃語(?)を

與まるとよそはふりゆかりな

夜半亭几董書

天明七丁未夏上浣

其一

蛍やかさしありさけ子の四月に　暁臺

飛蝦若る日の脚くろうとき　几董

遠矜にみのう羽搏やはらかろん　月渓

咲てうけうれ梅ちらしつゝ　青蘿

月うすむ春風の酒買にやり　董

彼乃は鍋しまかとそくしう　圭

絲遊子の新ちうれ冬と山越し　蘿

ゑ丈の飯笈一合うれしよ　渓

ねうさの茶乃葉も菰（コモリ）足　臺

廓しを逃るゝ露乃あかつき　董
鄙びし刀をさしたる袖の月　渓
須广乃無村のさかきふ　蘿
虚洞ハ鷄の声もふさがる　董
味かゝる鬘の伊達の花え　臺
折もよく本因坊の俤かくし　蘿
秘めみく書出そこ写しとる　渓
子ま封しられし猿乃文紋　臺
普請の崩れし蟬花さかる　董
巣れ津乃想するう飛ちる　渓
美少人死なる手なられ　美作　蘿

あまりやら春れ待く世をよし　董
儒乃役人とてもさらさき　臺
よりし雪柳の廊り澪澪り　蘿
裡乃領とたわし　貴家　渓
汚らしの人乃味も身に負れ　臺
秘明育を神もうけさや　董
これまさへ今へともふて古き足　渓
邪らの荒も垣飽　七島　蘿
弓張る五更の天ハ澪りを　董
さいゆうた院乗乃衣　臺
襟乃作るえくらぬらる襤に　蘿

こゝ果多くし悔よ莫う者　溪
一乃湍も二の湍も高き聲かり　臺
芦うりそこし炬火ゟ次　董
来五石餘りし花ゟ稀る結　溪
寂しふ汲つ捐活に子蔵　蘿

花の蕊らんまとうし千鳥乃
暑千ハ氣めとさえ　青蘿
うつゝ火やへ秋ある梟くら　月溪
寂しし鳥乃森ハもある音
江の梶くれふあ浪しけつるん　几董

佛門に入ける松乃風　暁臺
岩道の身とゞろゆる秋の月　溪
剛飯喰て飯る居の日　蘿
足利のあらそふ末の文なりし給　臺
うつらふよ来る寺へ飯る　董
炙鯖をひさぐ社家うきつらき　蘿
よるへ歩きぬ旅乃ふくる　溪
傘工ら傘干ならべ休みかむ　董
旅しめて雇ふ宿もかし　臺
おほつかなく元き芒の髪　溪
二度めの妻は般乃柴　蘿

月あかりてらす国のこゝろ名　臺
旅ねやまけふ人麿をしたふ　董
豊くらく花と年ふる仮泊　蘿
入りのあかる雨ちらつくる　溪
矢軍に胄奴（エヒス）の器をとめける　董
泥をぬぐふあけれ使ふりけれ　臺
諸天の糞をおちりふ卑居て　溪
をかしまふくきもられ為毒　蘿
行とひら扇の恋もし白子に　臺
旅下ら娘をやりかりさるも　董
ちらうりを緋の袴や浅葱や　蘿

ゑふも木言ても吹まくるうらら　溪
月のおもふ為縁る走る飛人ども　董
二階の裸太ぞれ名れ　臺
追善に浄るりうるくふの月　溪
木津いちとも錦の絵　蘿
秋のゐも大吹の局わりをして　臺
鬱うきてくるも蒼木きくて　董
飼殺を猿のもと生ききうけ　蘿
涼しきをまきとこそれの朴　溪
花をさは岩のうしろの速傍　董
興いみけるよ兎毫儲さやれ　臺

其三

雨雲にめぐりもあへで夏乃月　月渓
田中乃小川に生ひ添ふ萍　暁臺
簾捲浅茅か宿乃基をすて　青蘿
そこらめぐりて皆覺えけり　九董
注連縄に鳥居乃渡りかけ流し　臺
枝へ落し雷乃あとで　渓
大宮司たよりにえんはきて　董
娘かくれて人をたづねしや　蘿
宵し乃醒ぎさまならく　渓

新酒船乃錢まゐる月　臺
待合は秋の古手に花立出し　蘿
女あるじの眼鏡かけつゝ　董
灌頂を大日房の勧めあり　臺
冬のよあら茶の湯まゐる白芭　渓
小野岸に今朝の初雪さえ深　董
鏡もなく流せし自利する窓　蘿
死なれぬ其きさらぎ光もの忌　渓
なつかは越の日もちく遊ぶ　臺
伽すゝむ津の空の門書語　蘿
さる乃茶屋を渡りてけり　董

雛乃宴さひしく果てけり　臺

もろこしよりふき入梅の夕風　溪

菜畑女子三條智恵小船頭　董

無筆乃嘘の合点はなしつゝ　蘿

口切に浪花の風呂敷のあらし　溪

もちて子乃名をよぶ秋の夜ろ　臺

逃ものへうかれても最上川　蘿

魁と成君が跡を第一秋　董

おそれつゝ咲き月の前　臺

行としくるふを雫の半鐘　溪

夕ぐれのおもき臧しみぐれ咲　董

久保を祈る医師の身かしき　蘿

後の子は浅野もいかしたうれ　溪

小石小坂乃風枚を抑す　臺

お祈りの門の戸を引あけ　蘿

木肉子来て桜乃埋火　董

苦哉名利人
楽矣乞兒身　几董

乾鮭に名利のあつかゝるゝも　

四は裸男乃雪や霙や　青蘿

狩合のあつはふるゝた犬乱て　暁臺

小松かまはに落るありけり　月渓
うつふ出る市の苧麻（カラムシ）肌寒く　蘿
乞子のされよ棒を棄ておく　董
こゝろしと板間へ移る古鼓　渓
踊子の役を稽古さる年　臺
旅にてあまり先立しのふ人　董
押よ運し抜もふつ太刀　蘿
百緒の茶入情手に包ミ捨　臺
ゐる嬉しさかはしける衣　渓
きし残る此宵の雪り暖く　蘿
男は高きものゝ舎律根を頼　董

情乃種まきける古の紙にも　渓
倖廟ゆかりの蒲公英の花　臺
旅ふけしむかし郁子寄の月　董
欲とらはれてかけしぬるを　蘿
また来る楊柳の宿女なと入ふ　臺
うきけゆかる雛まゝろ子　渓
園動く石里ゆきさ蛙の聲　蘿
蝶乃白さのまかりなりしく　董
茶をとりて童子の帰る雨深き　渓
よく民節ゆりあらへ風葉　臺
洒落しにうかれて細しまよ　董

ちりほりて風に木枯　蘿
氣色たて衛士か焚火の宵工え　臺
鳥の杖漂ふ月の影ありて　渓
騎出て芦毛の駒の萩を踏　蘿
雲乃鬢のあはさむ河　董
五百文錢数くつかふる金仏　渓
あつされ宋女か姿おもしろけれ　臺
龍顔寺を扇のくれ重ねて　董
烏帽子の名のかよる乃ぞく　蘿
砂川の流よ渡りし色一空　臺
行く先末なる俳諧の表　渓

桃李序

いつのほとよりいひはしめけん哥仙はいにしへの哥仙なりともいへは
うたよみ其数てふの中なる一人欠てあたらんとのへ
きく人都して同此年に仕ありてやう月を経るものそ
らるゝは流行にあそふらんも宗笑て同文俳諧の法書あら
るや實に流行なくして更に流行なし　さとらし
一圓郭中に流行して人を追ふて走るかことし　先にするもの
の却しはわするゝものを追ふて行る流行の先後何をか
はかわるゝをも弁へて只みつから胸襟をひらくしもて
はしらの俳諧にて室は又かの俳諧に到てむすへてん云へ
なりあらるもはし是此集の大意なり

蕪村識

牡丹散て打かさなりぬ二三片　蕪村
卯月廿日のあり明の影　几董
すぶきして翁や門をひらくらん　丶
年かくれのふもとへ入くるま　村
とふ行し街の櫂筒へかくし　丶
百里乃陸路とまりさためは　董
新枕瘧(ヲコリ)をふるきのへかぬ　丶
山田の小田乃ふ稲を刈ひ　村
夕月よ隣りて降る四十雀　董

わとこしたしいりしを僚(ヨル)　村
月ちらつき若き葉とすゝる　董
當麻へおりしと風ながたに又　村
清ふなしやさ茅のする佛ら寺　董
三尺つもる雪れさとりぬ逢　村
觸りしうめる猿うちふ無つゝん　董
兎脣(イクチ)の素乃さく後よあく　村
糧持あるむしれさるよ髭きすて　董
はられてゆ浮香のさりふうつ　村
綿さしみて琴音をよむ差る社　、
博士ひとゝゝ見とさとさ　董
ト

栗負し馬倒まろびたる峠にて　村
樗咲なる〻野八町　董
立あがる虹は浅間のけふりより　村
勅使乃旅宿中うれしけ　董
にく獲なる貧(アチカ)の魚乃腹毒ふ　村
日へ行なりし又あられ降　董
久し進れ見ねりかな堂供養　村
ほうりよさける人まうへし　董
十六夜の晴よひ子はへるいゞれた　村
さころ子あゐる番場松本　董
駕昇の待抜見てぬみのゐ　董

さゝ稲もあからむなき成る　村
祟なき田中の小社神さひて　董
既にて雲宿ら公家も貧也　村
ひようした旅篭の飯とけ　、
まきくわやゐてもえとり火　董

冬こたち月骨髄に入夜哉　几董
此句老杜か寒き腸　蕪村
五里に一舎かしこき使者を労ひ　、
茶に深うねあかる井の水　董

さる家蔵の衰を語らん　、
まよひつゝ越路より出て　村
二の尼の近き霊ふつかれ経　、
七つ限りの門敲く音　董
鳥の巣や藪の梅やたち来ぬ　村
弭しらむ汐の浦人　董
女狐の深くも恨ミをとらへ召　村
妹にはけしやうれ髪の乱れ　董
ひとをし代をてゝをとゝのえん　村
出船のかふや追風吹状　董
月花に気比のうみを霞閉よ　村

床のまくし臥をと秋艸の上ふ　董
文机りも手摺へ維摩経　村
阿弥陀とこふ入遅き日の影　董
節人の妻にとゝれ奴旅の去　、
くらう灯し酒盛一斗ん　村
荒神乃棚に花の鶏啼て　董
守あされて飛脚ゆるしもやる　村
保昌ら任もふらずや三ゑん　董
いとうむ白し山吹乃垣　村
むしるの垣穂よび鈎をあまくる　董
こゝろそゑんと枝つる浪むろ　村

西国乃手形うけれ小日のくれ　董
貧しき葬の庭を中にわり　村
片側は野川流るゝ秋乃風　董
月の夜ころ乃遠き留守つゝ　村
停きらんそんふき車冷しよ　、
相国乃磔々やうらし　董
深つふあまたる帆うろけつ　村
鷲乃むのひらしとちぶ　董
根継する屋うけの総の下縫　、
巣つくる蜂の子をいのり呼　村

安永九庚子冬霜月